

です、近頃學事獎勵の結果、下流社會の子供が著るく學校に通ふて來た、で良家の兒女は日々これら家庭のよろしからざる數多の生徒と遊ぶので、不知不識の間に不良の言行に感化され、従前に比しては、大に兒女の品位を落して來た様であります、人情からみると貴族の子弟と貧業者の子弟と同窓に學ばせるのは、誠に感服しられない、貴族の學校は何うしても別に設置しなければならんかと思はれるのです。

▲子供の最も愛らしいのは、少しく辨別がついて笑はれる頃から、漸く言語を發し得る頃である。で五六歳までは、猶言語舉動に愛すべき所があるが「セツ八ツの憎まれ盛り」といつて、七八歳の頃は辯は充分たち、手足は充分利き、そうして未だ遠慮會釋といふことを知らない故、好んで人に

擲擲ひ、惡戯をなし、動もすれば惡口を放つので人に嫌がられるのです、女子は十一二歳の頃からや、遠慮といふことを覚え、十四五歳の頃は一變して頗る謹慎となり。十七八歳よりは、發情期と共に大に愧氣を催ふし、些々たる言語にさへ、顔を赤らめるのであります。年頃になつて人中で餘りシヤシヤしてるのは、女子に取りて趣といふものが一更ない様に思はれます(終)

二四戲會

楠 田 睦

私が田舎を出て丁度四年計り東京で諸姐の御厄介に成て居ります内に種々面白き御話等澤山に承りましたが、此二四戲會程滑稽で併も眞面目で面白き話は且て聞た事が御座ひません、尤交際が狭

かつた故でも御座りましょふが、斯申升と只今は至て交際が廣ひよふに聞へますがそゝ云ふ事情でも有りません、ツマリ社會が違つて居た勢で御座りましょふ、兎に角此様な不思議な事は世に多は無かるうと思ひ升 諸姐達何卒私の爲め否々二四戲會の爲めに貴重な時間を五分乃至十分間を特に御高覽の爲め御費し下さる様に願ひ升、
 偕て物の附合すると云ふは不思議な結果を來たすもので御座り升 去る二月四日に東山の平野やで藤澤文治郎氏「京都の木版印刷業者」が催された懸賞圖案の審査を囑託された連中は 金子錦二、西行菴小文、龜屋良則、島田彌一郎、村上文芽、若狭屋元茂、神坂雪佳、小西大東氏の八人で御座りました、ソモゝ不思議の初まりは此二月四日と云ふのに在り升即ち二四ヶ八又八を二分して四

と云ふ數の是等にも心を止めて頂きたひと思ひ升此八人の内の長年者が金子錦二氏で又少年者が小西大東氏でソシテ可笑しひ事には 此年長者がおどろろしき髯男で又年少者の小西氏が彫刻高雅なる古代模様の菊石「東京でアバタ」で御座り升した而して中に扱まれた六人の内 西行菴、村上龜屋の三氏は古式の方で小西氏と同じ………の方で御座りました而して島田、若狭屋、神坂の三氏は金子氏の方で髯でした斯の如く八人の内の四人が髯で四人が菊石で在りましたが殊に可笑しかつたのは髯の四人が洋服、菊石の四人が和服で御座りました。で、どうも不思議と云ふので、其年を加添へて見ましたらば、菊石四人の年の積が百六十五で又髯四人の年の積も矢張り百六十五でしたハテ面妖な此は奇だ、妙だ、變だ、ねつたと、異

口同音に謂れたが、こんな妙な會合は又と無いから紀念として一ツ會を造るゝ殊に二月四日と云ふも尙更不思議だと云ふ處から、二四戲會と云ふ一ツの會を組織せられましたが其二回の會合を去る十一月十日に東山の西行菴で開れましたが装り附から調理まで悉皆、其面相に縁で居ました其趣向は夜話の茶の湯で 其道具及菓子料理の事も申上
 升 燭臺が菊燈夫れに燈心を長く垂れて髻に準へ
 而して床に掛けて在る軸は石川丈山の筆で「氷消へては浪古苔の髻を洗ふ」と云ふ句で御座いました
 た 而して茶釜はアバタ準へ霰釜と云ふのを用ひ
 茶碗もアバタに準へ（粟田焼）代へ茶碗の銘は翁
 で染附の刷目之は髻に準へたのです 茶杓が胡摩
 竹干杓が關羽と云ふ銘で 水滴が古備前（美髻）取
 菓子私が爲めと云ふ銘で 薄種に拂子の烙印を

をしたもので 夫れに一首の歌が添へて在りました
 た 蒸菓子 銘がかもかげと云ふので 鶏卵焼の
 皮に柚アーンを入れたものでした 之にも歌が有り
 ましたが是は後にいつしよにして御覽に入升 而
 してお茶があまり結構なので亭主役の西行菴に茶
 の銘を尋られましたら 亭主は左様此の茶の銘は
 菊石と云ふので御座り升と答へられました之も一
 寸座輿で中々面白らう御座いました 而して茶は
 終りて酒宴に移りました 先づ折敷膳に椽高と云
 ふこしらへで お膳の蒔繪が光淋の菊で 吸物椀
 が刷目で其中の料理は 海老の髻吸物を雑炊仕立
 にして ウル餅が入れて有りました 之も髻とア
 バタのこしらへで有り升 而して小皿が籐豆腐に
 蓼にからすみ 椽高の中の餅が鶏卵焼、海老、小
 巻鱈の白髪焼、而して刺身が石ガレイの菊菜あへ

夫れに髻大根と、あしらひにしたる物。斯の如く萬事に心を盡しての小集りでした既に酒宴も爛ならんとする頃に、何れの何人か此會を聞き知りて髻籠の中に袖を入れて見舞に贈られました。而して餘興には名々の得意の技術を奮ふに歌詩句や畫を以てし、アバタ連は髻の悪口を書き又髻の連中も之と同様で、此夜は更るまで斯の如く愉快に、過されましたが、此會に於て特筆せねばならぬ事は、斯の如き寧滑稽的の會にも係らず、此席上の雑話から京菓子子の發達をはかる爲めに來春を期して菓子子の相撲を興行しよふと云ふ事を決議して而して此開催には又此二四戲會の連中が幹旋の勞を取らうと、定められた事です。又此菓子子相撲の結果や、二四戲會に面白き話が御座ひましたらば早速に、此雜誌を借りて諸姐に御話申上たひと存じ

七十二
升兎に角此様な、一時の戲會が爾かく實業に貢獻するよふに成つたのは誠に喜ばしい事であると存じ諸姐に御話申上り

髻の菓子子に添へて 若狭屋元茂

夜をこめていざや遊ばんおもふとち

うき世のちりをかき拂ひつゝ

おもかげと云ふ蒸菓子添へて

君がよはかきりもしらぬながつさに

にはへる菊や千代のおもかげ

同しまどひの席にて 金子 錦二

さゝれ石に似たるあばたの人々を

あつめて髻の長き君か代

痘痕者蕃髻者よりなれる二四戲會に

河瀬 芳

いものあるかははさながら菊の花

すゝきのことに髻にまじりて

同しく情歌

僮丹 董

今宵くまるゝかもひの底を

袖にそくばの數つゝむ

探紅葉

小西 大東

露しもはふもとよりげに繁からし

とめさし山のかひのみみぢば

千もとの菊を植たひける人に贈るとて

仙人のめぐつてふ花をうつし植て

ちよをかそふるませのうち哉

此の會の八人の内には畫の大家が居られ面白き畫も出来ましたが之は此次に致し昇

忙中閑語

其 子

▲年は新になりぬ。さらば年と共に吾等の生活を
も新にせんか。昔者、支那の賢哲、日々になれ
と教へぬ。近くはカーチギーといふ人、一日毎に
己を改新する人にあらずんば、共に爲すに足ら
ずと誠めぬ。日毎に新ならんこと、吾等凡人に取
りては、誠に困難なりとするも、希くは年毎にだ
に新ならば、吾が望は足りぬべし。

▲不言實行といふこと、男子に取りても、もとより
ながら、女子には殊更必要の言葉なりかし。半熟
の教育を受けたる人、生嚙りの智識ある人は、時
としては、多言不行に陥り易し。かゝる女子は、
人の妻となりては、顎もて人を指圖する許り、自
ら手を下して家政の事に當らんとはせず、たゞ賢